

## 加子母の里山資源

## ―「域学連携」による地域づくり―

田口 幸子

私が暮らす中津川市加子母は、岐阜県中津川市の中でも最北端にあり、もともとは岐阜県恵那郡加子母村でしたが、平成一七年に中津川市に近隣の町村と編入合併し、中津川市加子母となりました。合併当時は、長野県山口村との越県合併として、テレビなどでもよく取り上げられました。最近では、リニアの駅や車両基地が中津川市に出来るという事もよく取り上げられています。

そんな加子母は、面積の九四%を森林が占める自然豊かな山村です。人口三千人、約千世帯が暮らす加子母は、国道沿いに加子母川が流れ、その脇に集落があります。現在小中学校は二五人から三〇人の一クラスで保育園に至っては一クラス二〇人に満たない状況です。高齢化率は三〇%を超えています。元気なお年寄りが多く活き活きと活動されてみえる方が多いのに比べて、少子化が大きな問題となっています。

加子母の地場産業は林業です。加

子母の周辺は裏木曾と呼ばれ、昔から良質な木曾ヒノキがたくさんあったので、江戸時代に尾張藩の所領として制度が作られ大切に守られてきました。加子母の村人でさえ入る事が禁止されていて、「松一本首一つ」というくらい大切に守られてきました。そんな加子母の木曾ヒノキは、東濃松として産直住宅となるだけでなく、伊勢神宮で二十年に一度行われる式年遷宮のご用材や、皇居や姫路城などの伝統建築、また、名古屋城本丸御殿の復元にも協力しています。

この事からわかるように、実は加子母と名古屋は歴史的にも昔から繋がりが深く、「千年の森」がある加子母は木曾川の上流地域であり、乙女渓谷と呼ばれる辺りの最上流地域では、エメラルドグリーンの水が加子母川へと流れ、長い時間をかけて木曾川下流域の名古屋へ繋がっています。昔はこの川を使って加子母から熱田区の貯木場へ木材を運んでいた



写真1 加子母地区眺望

事もあり、その様子は加子母の公園の壁面に描かれています。また、加子母には名古屋城本丸御殿復元記念として平成名古屋市民の森があります。ここには、平成二十年から毎年名古屋から市民の方が植樹に訪れています。他にも、なごや環境大学の講座で加子母を訪れるツアーが行われたり、北区や千種区などの区民まつりに加子母がブースを出したりと、近年も盛んに交流させて頂いています。

加子母は林業だけでなく農業も盛んで、飛騨牛とミネラルトマトが有名です。名物に鶏（ケイ）ちゃんや朴葉寿司などありますが、区民まつりで物販などするとすぐに売れて



写真2 加子母の温泉スタンド

しまう人物物です。また、明治二七年に建てられた芝居小屋「加子母明治座」は有名で、住民による地歌舞伎が行われるだけでなく、亡くなられた一八代目中村勘三郎さんの襲名披露公演がこの明治座で行われたり、「映画中村勘三郎」が上映される時は息子の勘九郎さんがトークショーにいらしたりと、林業・農業・伝統文化など地域に根付くもの全てが、昔から大切に住民の手によって守られており宝物となっています。

そんな加子母は、昔ながらの生活が今でも多く残っています。ほとんどの世帯が自分の山を持っており、薪ストーブの家も多く存在します。こたつも掘りごたつの家は多いです。

し、お風呂を薪で焚いて入る家もまだあり、夕方になるとあちこちの煙突から煙がでています。他にも家には山水が引いてあったりと、昭和の暮らしがまだ多く残るゆっったりとした山村です。

そんな昔ながらの山村ですが、決して閉鎖的な地域ではありません。加子母には農業や林業、様々な職種で移住されるイターンの方が多く、地区の行事にも積極的に住民と一緒に参加します。加子母の住民は比較的他の地域にくらべると外から来て下さる方をウェルカムに受入れます。それは、一〇年以上前から定住しているイターンの方が積極的に地域づくりに参加して下さり、イターンの方が地域に入りやすい地盤を作ってきた事が大きな理由だと思います。もちろん、少子高齢化が進む加子母にとって人口が増えるのは大変嬉しい事です。

また、行政も地域の将来を考え、地域住民と一体となって積極的に動く地域だと思っています。たとえば、豊富な自然資源を活かして、用水を利用した小水力発電を昨年導入しました。地形の高低差を活かして、また地区にきちんとお金が回るような仕組みを考えて現在稼働しています。その他にも、温泉スタンドが加子母にはあります。仕組みは自販機と同

じですが、お金をいれると温泉が出るので、それを家を持って帰り自宅のお風呂で温泉に入ります。加子母では、荷台に温泉用のポリタンクを積んでいる軽トラをよくみかけます。夕方になると、このスタンドのまわりにはポリタンクを積んだ軽トラが並びます。そして、今年度は公共施設に薪ボイラーを導入する事業が進んでいます。また、大工さんが工夫して、薪ストーブで発生した熱を床暖房などに活用したりと、地域の特性を活かした住宅づくりにも取り組んでみえます。

加子母の地場産業である林業は、一〇〇年単位で親子何代にもわたって引き継がれて立派な木を育ててきました。加子母の住民は比較的ゆったりとした性格で長い目で物事を考える人が多いと感じますが、それはそんな木のサイクルとよく似ているような気がします。少子高齢化は確かに大きな問題ですが、昔ながらの良き農村の生活を残しつつ、地域の資源を活かした事業も行いながら、加子母という地域はゆったりと存在しています。

そんな加子母では、二〇年前から「域学連携」という地域と大学が一緒になって地域の伝統を継承したり課題に取り組む事業を行ってきました。そんな「域学連携」の取り組み

をこれからご紹介します。

まず、平成七年にはじまり、今年二〇年目を迎えた木造建築を学ぶ「加子母木匠塾」。この事業は、約二週間の合宿の中で地元の大工さんに習いながら建築物を完成させる建築実習です。現在関東・関西を中心に七大学が参加しており、加子母に学生がいると「木匠塾の子かな？」と第一声がでるほど地域に浸透しています。そんな木匠塾は様々な大学が参加するため、各大学から幹事や副幹事、リーダーを決めて、加子母で毎月幹事会を行っています。メイン実習は八月の二週間ですが、毎月何時間もかけて加子母に集まり、全大



写真3 加子母木匠塾の様子

学で顔を見ながら話合う幹事会がきちん

とあるからこそ、メイン実習がきちん

ちんとあるからこそ、メイン実習がきちんと行えます。木匠塾は地域住民の要望に応える施主制度で行っています。地域からの要望を聞き、各大学でどの要望を実施するかを決め、担当となる地元工務店の方と設計や材料について相談して、施主となる地域住民ともじっくり話し合いながら進めていきます。この作業を、毎月加子母に来る時だけでなく、電話やメールなどでも頻繁にやりとりをして、半年以上かけて行っています。同時に、道具の使い方や技術を大工さんに教えていただく機会を作ったり、林業に関する歴史を学ぶ機会も積極的に作ったりしています。併せて、地域の方へ自分たちの活動を知っていただくために、木匠塾通信という広報誌を作成したり、SNSを使って情報発信をしたりしながら自分たちの取り組みを地域の方に知っていただくよう、合宿に取り組み制作物を完成させていきます。さらに、合宿中には地域住民との交流イベントを企画し、子ども達からお年寄りまで、つながりをより広く作ろうと工夫もしています。自分たちが製作物を作り満足するだけでなく、地域の方に喜んでもらいたい自分たちももっと加子母を知りたいと、様々な企画を行っています。

また、メイン合宿の時期には一八〇名ほどの大学生が一緒に木造施設に寝泊まりする事になるので生活面も決め、食事や洗濯、掃除なども交代で行います。「夜遅くまでみんなで賑やかに」が楽しい時期ですが、ケガなくしっかりと工期を終えられるよう生活にメリハリをつけ、一年かけて準備してきたこのメイン合宿をどの大学も大切な時間にしようと努力しています。

木匠塾が始まった頃は、交通マナーが悪かったり夜遅くまで大声でワイワイやって住民から苦情がでたりして、大学生に対して良いイメージをなかなか持つてもらえませんでした。しかし、教えていただく工務店の方とのやりとりやお世話になっている方との繋がり、そして関わって下さる多くの地域の方などのアドバイスから、年々各大学が地域とのつながりを大切にと考えてくれるようになりました。仕事の時間を割いて自分たちに様々な事を教えてくれる工務店さん。頑張つてといるような差し入れを下さる地域の方。そんな人と人との繋がりがや温かさに触れ、自分たちももっと加子母の人たちに喜んでもらいたい、自分たちももっと地域に関わりたくいと、学生自身が思うようになり、年々地域との交流

に力を入れ工夫も重ね、今の形が出来上がりました。

木匠塾は各大学サークルのような形で参加が多いのですが、学生の中には四年間加子母に通ってくれる子もいます。先輩の姿を後輩は良く見ており、各大学の想いだけでなく地域との繋がりを大切にすることも引き継いでいます。ここでは、ただ単に建築技術を学ぶだけでなく、人と人とのつながりの大切さや集団生活を通しての学びなど、様々な事を学びます。特に、施主となる地域住民とのやりとりから生まれる人と人との繋がりはとても大きく、家族のような存在になります。

お施主さんは自治会であったり老人クラブであったりと様々ですが、卒業したあとも加子母に頻繁に帰ってきてくれる子が多くいるのは、心の繋がりの大切さや、人と人との繋がりのあたたかさを加子母で感じてくれたからだと思っています。今でも多くのOBやOGが加子母に帰ってきてくれますが、みんな加子母を第二の故郷のように思ってくれているのが本当に嬉しいです。最近では、当時の学生が仕事で加子母の木を使ってくれたりもしますし、木匠塾に今年から参加している名城大学の柳沢研究室は、柳沢先生自身が加子母木匠塾のOBであり、世代を超え

た参加をして下さっています。このように二〇年たってこそ新たな出来事もちらほら出てきました。

そんな木匠塾は、加子母で活動する大学のお手本になっています。また、息の長い活動ができる理由も多くの方に聞かれます。私は、地域と学生と行政が非常にバランス良く活動しているからだと思っていますし、地域住民の方の学生を見守る親心のようないいと、とにかく一生懸命に取り組む学生の姿勢があるからだと思います。木匠塾の活動は、平成二四年に農林水産省の都市と農山村のオーライ（往来）の活性化事例を表彰する「オーライニッポン！」の大賞を受賞するなど、広く認めていただいています。今後も、木匠塾は加子母の「域学連携」の柱として存在し続けると思っています。

木匠塾の話ばかりでしたが、その他にも、東京藝術大学OBによる明治座クラシックコンサートも十七年目を迎えました。こちらは、先ほどもご紹介した芝居小屋の加子母明治座を訪れた東京藝術大学・田中千香士先生が「本物の楽器の音を聞く機会のない山村地域の子どもたちに、ここで本物の楽器の音を聞かせてあげたい！」という想いで始まったコンサートです。

最初は明治座でのみ開催していま

したが、今では加子母地域の保育園や小学校、デイサービスなどで演奏したり、地域の子ども達と一緒に行うミニコンサートも行っています。残念ながら田中先生はお亡くなりになりましたが、先生の遺志を継いで教え子の皆さんが、毎年開催して下さっています。演奏される方は、海外で活躍している方や各地の交響楽団に在籍されてみえる方など、プロの素晴らしい方ばかりです。普段クラシックを聴く機会のない加子母の住民ですが、子どもから大人まで毎年このクラシックウィークを本当に楽しみにしています。

木造建築の明治座で行うクラシックコンサートは、専用のホールとは



写真4 明治座クラシックコンサート

また違うあたたかな時間を作り上げます。この独特のあたたかさに魅了されて、県外からも多くの方がコンサートに訪れて下さいます。

正直、実際に演奏される方に満足な謝礼を払えていないのが現状です。しかし、演奏者の方は、田中先生の「子ども達に本当の楽器の音を聞かせてあげたい」という想いを大切に加子母に来て下さり、加子母では地域の方が協力して演奏者の方へ少しでも加子母で良い時間を過ごしてほしいと、美味しい郷土料理の御飯づくりや運営スタッフなどをしていきます。その互いの気持ちをみんなが理解しあって、演奏者と地域みんなが田中先生の想いのもと一つになって活動を続けています。ここでも、心のつながりが息の長い活動の元になっ

ています。明治座では、秋に加子母歌舞伎公演も行われます。中津川をはじめとする東濃地域は地歌舞伎が盛んな地域で、芝居小屋が多く存在します。加子母にも歌舞伎保存会が存在し、年に一回公演を行います。そのときに舞台美術を地元の大道具さんと一緒に担ってくれるのは、活動一三年目を迎える武蔵野美術大学です。ここはまた活動が独特で、現役の学生をOB、OGがリードしてくれます。学生の時に加子母で舞台美術

の経験をし、その後社会人となったOB、OGは、地元の大道具さんたちとの繋がりを大切に持ち続け、それを後輩にもつなげていく大切な役目を担ってくれています。そんなOB、OGは舞台での指示も地元の大道具さんに負けず劣らず的確で、加子母歌舞伎には欠かせない存在です。そんな先輩の姿をみて、学生は自分たちにも出来る事を一生懸命にし、そして卒業してからも加子母に帰ってきて活動を続けてくれていきます。現役とOB、OGと一緒に活動するのはこの武蔵野美術大学だけで、このスタイルもまた、長年継続できる良い形なのだと思います。

以上のような三本柱が加子母にはありますが、昨年、総務省のモデル事業の採択をうけ、新規大学との域学連携をスタートさせました。今まで、関東関西圏ばかりでしたが、ここ名古屋をはじめとする中部圏の大学との連携も多く生まれました。そのいくつかをご紹介しますが、まずはじめは、今日この後お話しされる名古屋大学の高野教授。先生は以前から加子母に足を運んで下さっていました。この事業にあたって加子母にある温泉スタンドの活用について学生と一緒に考え、管理団体に提案をして下さいました。

他には、日本福祉大学の千頭聡教



写真5 「加子母の将来について」ワークショップ

授のゼミは、加子母中学校三年生の生徒と「加子母の将来について」のワークショップを行って下さいました。加子母の子ども達は、高校を卒業すると一回は地域の外に出る子が多く外に出てからでも故郷の良さはもちろんわかるのですが、このワークショップはまだ加子母から出た事のない中学生が自分の故郷の良さを改めて感じる時間になりました。そして、普段交流のない大学生のお兄さんお姉さんとの関わりは、本当に大きなものになりました。このワークショップは毎年継続して行う事が決まり、今年度のワークショップも行われました。

このワークショップはこの一日で



写真6 加子母で活動する名工大の学生たち

終わりではなく、中学校でも授業と繋げてくれています。加子母には「加子母教育の日」という行事があり、その日は地域の方が先生となり、地域住民誰もが参観できます。もちろん、学生も参観に訪れます。中学三年生は日本福祉大学とのワークショップとの延長として、保護者と一緒に加子母の将来について話しあいます。子ども達が学生と一生懸命に話し合った故郷への想いを、保護者の方と一緒にさらに深く話し合っていく姿が本当に印象的で、故郷を大切に想い、将来自分たちが「加子母に帰ってきてもっと良くしたい」という子ども達の言葉に、本当に勇気づけられます。

これは日本福祉大学の先生から伺ったのですが、そんな加子母の子ども達をみて、学生も自分自身の故郷について改めて考えるそうです。先生も、このような経験を通して、学生自身も将来自分の故郷を大切に思い、暮らす場所地域づくりをして欲しいと願ってみえます。加子母の子ども達にとっても、学生の皆さんにとっても、お互いに故郷を想う大切な時間になっているのが嬉しいかぎりです。

そして、最後にご紹介するのは名古屋工業大学。こちらは昨年藤岡伸子教授のゼミが加子母に来てくださり、加子母に今ある資源を活かした地域活性化に取り組んで下さいました。加子母の景観を活かしたサイクリングコースづくりや、三名の方が加子母をテーマに卒論を書き、様々な提案をして下さいました。

名工大の活動は自転車での移動が多いのですが、この自転車を使って地域を回るのには、車で回るよりも多くの発見がありますし、地域住民との触れ合いも生まれ、地域に溶け込むスピードが他の大学よりも本当に早かったと思います。加子母の自然の中で私も生まれ育ったので、この自然が当たり前だと思って過ごしてきたのですが、加子母に残る山村文化のどの事にも興味を持ちじっくり

と住民の話に耳を傾けて聞いてくださる姿に、私自身も自分の故郷の良さに改めて気づかせてもらったと思っています。

また、雨漏りなど老朽化した明治座の耐震改修工事のきっかけも作って下さいました。木造建築の伝統的な形を残しながらの耐震工事は、大学の枠を超えて多くの方にご協力いただき、学生も交えて現在進行中です。

そんな名工大は、今年加子母にある住宅展示場を拠点にして、少人数で加子母に滞在する学生の受入れや地域とのつなぎ役、また学生同士の交流の場の提供などを行って来ています。その他、地域内の広報に学生ページを設けて活動の様子を報告したり、地歌舞伎に参加するなど、昨年以上に地域に密着した活動を行っています。加子母の木工所と学生のコラボによる木工プロジェクトや、加子母の風景を映像に残す映像プロジェクトなども立ち上げ、地域の課題に寄り添うような活動も始めて来ています。

今ご紹介した大学以外に、今年も新規の大学がいくつか加子母を訪れ、連携が取れるようにと取り組んで下さっており、地域と大学との連携の輪が広がるだけでなく、大学間での交流も行われ、加子母でつながる学

生の輪も広がっています。

地域の方々も、自分たちが当たり前に大切にしてきた暮らしを同じように大切に思っているのと学ぼうとしてくれる学生の事がかわいくて、本当に自分の子どもや孫のように付き合います。学生が多く加子母に来てくださる事によって、加子母の方たちも自分たちの暮らしに自信がつくというか、特にお年寄りは本当に元気に活躍してくださっています。

学生も勉強として山村文化から様々な学びがあるのだと思いますが、都会から離れていると不便にみえるこのような小さな山村の住民が、昔ながらの生活も大切にしながら自分たちの故郷に誇りを持って活き活きと暮らし姿をみて、何かを感じてくれていると思います。

最初にもお話ししましたが、加子母の人たちは、代々何十年、何百年と大切に手入れをして木を育てています。一〇〇年かけて育てた木は、その後材木になっても一〇〇年以上生き続けます。そんな子どもや孫の世代につなげる仕事をしてきた加子母の人たちは、目先の事だけでなく自分たちの孫の世代までを見越して暮らしを考える事が体についています。加子母の人は恥ずかしがり屋というかあまり前に出たがらないのですが、とにかくゆったりとかまえて

物事をどっしりと考えている所があります。技術や伝統だけでなく、そんな加子母の人の想いや暮らしも、この域学連携を通して学生の皆さんにこれからも知っていただき、社会に出たときに活かしていただければと思っています。

今後も加子母は「域学連携」を行っていきますが、加子母全体が形のない大学のキャンパスのようになればばと思っています。加子母のどこに行っても誰と話しても学びの場となるような場所。そして、いろんな地域のいろんな学部の大学が、加子母に集まって一緒になって活動できる場所。そんな、形のないキャンパスに加子母がなっていくことを目指していきたいと思っています。

そんな加子母の想いを、名工大の学生が二〇一三年度の卒業設計として制作してくれました。「加子母大学」と題したこの作品は、様々な賞を受賞しました。地域の想いをきちんと受け止め、学生の地道な努力が形となっている素敵な作品です。また、加子母の魅力が詰まった「かしもお散歩マップ」も賞を受賞するなど、嬉しい事が続いています。

今日会場に来てくださった皆さんにも、機会があったらぜひ加子母へ足を運んでいただき、加子母を感じていただければと思います。いつで

も加子母でお待ちしております。



写真7 「加子母大学」